



小鹿山 陽 介さん

“絶望的な格差社会” “若者が夢を抱けない社会” など、世の中ではさみしい言葉が溢れています。その言葉は、ある意味先輩たちが私たちの未来を配して下さったことだとも考えることができます。そして、それはありがたいことでもあります。

でも、私たちはその言葉に悲観し、世の中が悪いから仕方がないなどとあきらめてしまっても良いのでしょうか。世界の国々の中には、厳しい貧困の中で将来の夢を見るところが今日1日を生きることも大変な子どもたちがいます。また、私たちの祖父母の時代には、戦争という不条理の中、幸せな将来を切り開く機会を与えられることもなく、その理不尽な運命を受け入れるしかなかった若者たちがいたことも忘れてはなりません。

それに比べ私達は どうでしょう。

思えば20年前、世界でも類を見ないほど平和なこの国に生まれ、社会や家族の愛情の中、今日まで育てていただきました。また、当たり前のように教育も受けさせていただきました。さらに本日は20歳の門出をこのように盛大に祝っていただき、たくさんの方々から温かい御言葉までいただいています。こんな幸せな私たちが悲観し、嘆いてあきらめてしまっは本当に申し訳のないことではないのでしょうか。

「若者には無限の可能性がある」とか「諦めなければいずれ夢は必ず叶う」ということを耳にすることがあります。いつの間にかそんなことは夢物語とあきらめてしまい、「努力してもどうせたかが知れている」などと言い古された言葉を盾に逃げてはいけけないではないのでしょうか。

以前母から聞いた話です。それは歌手のさだまさし

さんがコンサートで言っていたことだそうです。

彼は、小さいころバイオリンを習っていて、地元長崎では、神童と呼ばれるほどの子どもだったそうです。それで、中学校から親元を離れ、東京の学校に進学しヴァイオリニストを目指したそうです。しかし、そこで自分の力の限界を思い知り、その上進学の失敗や病気などが彼を襲い本当にどん底だったそうです。そう裕福でもない中、自分を信じ東京に送り出してくれた両親のことなども考えると、いたたまれない思いだったと想像できます。そんななか彼は、フォークギターと出会い、その頃、はやっていた若大将こと加山雄三さんの曲など練習をして、音楽の楽しさを思い出したのだそうです。そしてそこから、もちろん才能や努力のかけがあり今に至っているわけです。

その彼は、長崎出身ということで、原爆記念の日に長崎でチャリティーのコンサートを開催していました。そこには無償でたくさんアーティストが参加しています。その中には、あの彼が苦しかった当時あがれていた加山雄三さんもいます。「佐田のためならいいよ。」と、遠い長崎の会場であるにもかかわらず何度も参加して下さっているそうです。

さだまさしさんはこう言ったそうです。

「どこでもドアがあって、苦しかった当時の自分に会うことができたとして、『30年後、加山雄三さんが“お前のためなら喜んで”』と、長崎まで無償で歌を歌いに来てくれるぞ』と教えたとしても、その時の自分は『まさか、そんなことあるわけないよ』と答えるに違いないです。そのあるはずもないと思えるようなことが起きるのが未来なのです。夢はあきらめてはいけません。」と。

自分の知っているさだまさしさんはすでに成功された方で、運や才能に恵まれた方だと思っていました。でもこの話は何となくではありますが、実感として胸に残りました。

まだ、私たちは人生のほんの入り口を歩いているにすぎません。自分の人生を、人や置かれている状況や社会のせいにしてあきらめてしまっはもったいないことだと思います。こんな恵まれた国、時代に生まれた自分に感謝をし、「そんなことありえないよ」と思うようなことが起こるかもしれない未来を信じ、まずは目の前の1歩から大切に歩いて行こうと改めて肝に命じました。

そして、今の自分がこのようなことを言うのは恥ずかしいのですが、いつの日か自分を支えて下さった人ばかりでなく、夢など語れない社会に生きている人々のためにも働ける人間になりたいと思っています。



はたちの夢

本日は、私たちのためにこのような素晴らしい成人式を開いてくださり、誠にありがとうございます。ご来賓の皆さまより数々のご祝辞をいただき、心より御礼申し上げます。

私たちは、20歳となり、人生の大きな節目を迎えました。しかし、この節目は社会へと羽ばたくスタートラインにすぎません。そして、私はまだ学生の身であり、このスタートラインに立つため順番待ちをしている状態です。正直なところ、私はまだ将来何をやりたいのか明確な目標がありません。なので、今はサークル活動を始めとし、海外へ行ったり資格に挑戦したりと自らの見識を深め目標を見つけるために、日々さまざまな活動に積極的に取り組んでいます。学業に関しても、この春から希望していたセミナーに所属し、以前より関心のあった英語学の分野について、より専門的に学ぶ機会を得ることができました。

「やって無駄なことはひとつもない。全て将来につながっていて、いつか役に立つときがやってくる。」これは私の好きな言葉で、高校時代所属していた茶道部の講師の先生がおっしゃっていた言葉です。

社会に出たとき、私たちには乗り越えがたい壁が



根本智恵さん

いくつも立ち足はだかることでしょうか。そんなとき、今得ている経験や身に付けた知識が自分自身の手助けになるとそう信じています。まだまだ未熟者ですが、多くの経験を積み充実した未来へ向けて一步一步階段を登っていきたいと思います。

最後に、ここまで育ててくれた両親や支えてくれた方々に感謝の意を表して代表挨拶したいと思います。

本日は本当にありがとうございました。

■新成人が生まれた年の「広報ひろの」 平成元年4月～平成2年3月■

